

# グレーヴェ・イン・キアンティ市訪問 豊かな成果

## 広報うつく

### 特集

グレーヴェ・イン・キアンティ市友好訪問  
発行 戦略的広報特定プロジェクト  
発行日 平成27年12月1日  
住所 茨城県牛久市中央3丁目15番地1  
☎029・873・2111

## 中世の趣残す広場 市庁舎の壁に日の丸の旗

市民団は、6月25日から7月2日までの8日間、友好都市グレーヴェ・イン・キアンティ市を中心に、ピサ、フィレンツェ、ローマを訪問しました。今回の訪問は、グレーヴェ・イン・キアンティ市との友好を深める大変有意義なものになりました。この特集号は、市民団が視察したグレーヴェ・イン・キアンティ市の地産地消の取り組みなどをまとめ、今後、同市と更なる交流を深めていく上で、また牛久市のまちづくりの参考となる事項をまとめたものです。市民団の皆さんの報告・感想を基に作成しています。



夜明け前のヴェラッツァーノ広場

フィレンツェから郊外に出ると直ぐに「世界一美しい」と雑誌やテレビで紹介される「トスカーナの田園風景」が見られるのかと思っていたら、空港を出たバスは高速道路から樹林帯に分け入り、30分ほど走って小さな盆地に出ると「ああ、トスカーナだ」と一目で分かる風景が目の前に広がり、そこがグレー

## ワインと会話楽しむ夕食

かつて人々は戦争のとき攻め込まれにくいように山の上に住み、盆地の広場は交易の場として使っていました。その際回廊が売り場になり、建物は倉庫とし

て使われました。人々が山から下りて広場に定住するにしたがって、倉庫が居宅として使われるようになったのです。ですから今でも土日には広場に市が立ち

ヴェ・イン・キアンティ市でした。バスが街の中心の小さな広場に入ると、そこは12世紀はじめごろから形成されたという中世のたたずまいが完璧に残っていました。広場は、教会を頂点とする細長い3角形に石畳がしかれ、両辺にはレストラン、ホテル、パール、B&B（ベッド・アンド・ブレッックファスト）、肉屋、花屋、酒屋、美術品店などが並んでいました。教会の向かい側には趣のある市庁舎があり、その正面の壁には日の丸とイタリア国旗とグレーヴェ・イン・キアンティ市旗が掲げられていました。3角形の辺に沿ってアーチに支えられた幅数メートルの回廊が連なり、その屋根は建物の2階部分で、バルコニーになっていました。そこにテーブルとイスが置かれ、ずらりと並べられた鉢植えのゼラニウムが鮮やかに咲き誇っていました。

## ホテルとB&Bに宿

### 眠さこらえオペラも鑑賞

まず。グレーヴェ・イン・キアンティ市訪問第1日目の夕食は、この広場に面したホテルのバルコニーでとりました。3種類の Pasta にサラダ、肉料理。日没が遅いグレーヴェ・イン・キアンティ市でも、辺りは既に夕闇に包まれ、人影も少なくなった広場を見下ろしながら、ゆったりくつろいでワインと会話を楽しむ夕食は、まさにスローフードの地ならではの満ち足りたものでした。

第1日目は夕食後オペラ鑑賞がありました。演目は「フィガロの結婚」。人口1万4千人のまちで映画館兼用の劇場とはいえ、オーケストラの伴奏付きでオペラの上演が成立するのは「やはりイタリアだなあ」と、みんなで勇んで出かけた。

くことはできた」と言っていました。宿は広場に面したホテルとB&B、広場から3、4分離れたホテルの3カ所に分宿しました。B&Bは何世紀もの歴史を経た石造りの民家でしたが、シャワー、トイレは部屋ごとに新しい設備が付いていました。床だけでなく天井も剥き出しのレンガだったのには驚きました。

## スーパーの店員が

### 「こんにちは」「ありがとう」

グレーヴェ・イン・キアンティ市にはCO-OPとスーパーがあるだけで、大型のショッピングセンターはありません。スーパーで店員に「こんにちは」「ありがとう」と日本語で話しかけられた方もいました。広場は市民やアグリツーリズムの人たちの交流の場になっていきます。乳母車の赤ちゃんに出会った人がこんな歌をつくりました。

ピッコロはイタリア語で小さいという意味です。広場の周りはずぐ緩やかな斜面の林やブドウ畑になっていて、その隅に幾つかの新しいB&Bの建物があるように見えました。訪問団が泊まったB&Bも、営業を始めたばかりとのことでした。グレーヴェ・イン・キアンティ市ではアグリツーリズムは新しい産業として、まだ発展の余地があるのだと思いました。



ホテル・ヴェラッツァーノ レストランにて

# 動き出した友好都市との交流

## 派遣団の熱意に感動

### 「付き合い深められる」実感

グレーヴェ・イン・キアンティ市による歓迎式は2日目の午後6時から市庁舎で行われました。牛久市からは池辺前市長以下29人の派遣団。グレーヴェ・イン・キアンティ市からはソッターニ市長、副市長、市議会議員、市

議会議員、評議員など約10名が出席しました。式は日本とイタリアの国歌斉唱で始まり、牛久市民団は全員でしっかりと君が代を斉唱しました。ソッターニ市長は挨拶で「牛久市からの派遣団の熱意に感動を覚えている。池辺市長（当時）

のスローシティを目指す哲学には、とても心を動かされた」と述べました。池辺前市長は「スローシティは日本流に言えば『急がば回れ』だ。牛久市は必要な取り組みを着実に積み上げることで、必ずスローシティを達成できる」と述べました。

述べました。両市長の挨拶の後、副市長以下グレーヴェ・イン・キアンティ市の人たちが次々に立ち上がり「グレーヴェ・イン・キアンティ市と牛久市の友好への取り組みが具体的に動き出していることを強く感じる」とができて、感動を覚えている。「日本の文化に強い関心を持っている」「ワインやレンガだけでなく、木材の燃料ペレットの分野でも交流できる」などと述べました。

## 夕食会で絆さらに強まる

### 時間忘れる陽気なもてなし

す。ソッターニ市長はこれに非常に強い興味を示し、子どもたちの交換留学を提案。両者は「今後積極的に交流を積み重ねる。子どもも大人も交流できる具体的な仕組みをつくる」ことで合意したとのこと。市民団の中には、自分で

グレーヴェ・イン・キアンティ市の担当者に会い、美術交流の手がかりをつかんできてきた方もいました。

## 交流の仕組み作りで合意

### 牛久の教育・子育てに強い関心

牛久市民団からも、「ソッターニ市長、副市長、市議会議員の皆さんの話を聞いて、グレーヴェ・イン・キアンティ市の方々と心が通じ合っているのを実感した。牛久市とグレーヴェ・イン・キアンティ市は今後どんな付き合いを深めていくこ

とができる。今その基礎ができた」と強く感じている」との発言がありました。プレゼント交換で、牛久市からグレーヴェ・イン・キアンティ市に対しては、おひな様、日本酒などを贈り、ソッターニ市長には浴衣と下駄、うしくかつば祭りの手拭いを贈りました。グレーヴェ・イン・キアンティ市から牛久市に対しては、人間の頭が入るほど大きいワイングラスが贈られました。

この辺りの労働慣行では、午後9時30分を過ぎると貸し切りバスでもさっさと引き上げてしまうので、食事は9時30分終了厳守であることを、事前にきつく申し渡されていました。しかし実際のその時刻には、まさに宴たけなわ。食事を打ち切るか否か事務局が苦慮していると、ソッターニ市長が「バスは帰してしまえ。皆さんの帰りは何とかする」と言ってくれ

## これぞイタリア流おもてなし

### ソッターニ市長の手配で帰路に

たそうです。

お陰でさらに1時間延長して食事を楽しむことが出来ました。問題は、どうやってホテルに帰るかです。タクシーは40分先のフィレンツェからでなければ呼べないし、この時間では市役所の職員を動員することもできません。

結局第一陣の4人は副市長の車に乗せてもらい、残り3人はソッターニ市長の知り合いの人

たちに出動してもらって、ピストン輸送で帰りました。ホテルに帰り着いたのは、早い人で11時過ぎ、遅い人は12時ごろになりました。イタリアでは名が知られているという店主以下新人社員に至るまで、自分たちの仕事に強い誇りを持って生き生きと働いている店員たち。そのいかにもラテン風のおおらか且つ賑やかなもてなしで、トスカナ牛とワインを一緒に楽しみ、

牛久市民とグレーヴェ・イン・キアンティ市民の心のつながりはぐっと強まりました。



牛久市民団歓迎式にて



両市長は歓迎式の前、1時間ほど会談しました。そこで池辺前市長は食とエネルギーの地産地消をはじめ、教育や子育て支援など、まちづくりの取り組みについて詳しく説明したそう

たそうです。お陰でさらに1時間延長して食事を楽しむことが出来ました。問題は、どうやってホテルに帰るかです。タクシーは40分先のフィレンツェからでなければ呼べないし、この時間では市役所の職員を動員することもできません。結局第一陣の4人は副市長の車に乗せてもらい、残り3人はソッターニ市長の知り合いの人

たちに出動してもらって、ピストン輸送で帰りました。ホテルに帰り着いたのは、早い人で11時過ぎ、遅い人は12時ごろになりました。イタリアでは名が知られているという店主以下新人社員に至るまで、自分たちの仕事に強い誇りを持って生き生きと働いている店員たち。そのいかにもラテン風のおおらか且つ賑やかなもてなしで、トスカナ牛とワインを一緒に楽しみ、牛久市民とグレーヴェ・イン・キアンティ市民の心のつながりはぐっと強まりました。

# ワイナリー、オリーブ油・レンガ工場見学

## 品質と独自性を守るために

## 手間ひまを惜しまず

グレーヴェ・イン・キアンティ市ではワイナリー2カ所、オリーブ油工場、レンガ工場各1カ所を見学しました。ワイナリーも工場

も規模は大きいものではありませんでした。しかし、地域の特性を活かし、古い伝統を守り、匠の技を継承し、自分たちの製品の品質

の高さと独自性を守るために手間暇を惜しまず、自分たちの製品が他社製品に比べてどれだけ優れているかを熱心に説明する姿に感動を覚えた人が多かったようです。

最初に見学したワイナ

### 組まれ始めた観光ツアー

#### 日本からの客も増えそう

古い城ですが中は良く整えられ、熟成用の巨大な樽の真つさらな新しさと、貯蔵庫の棚で既に30〜40年は経っているという、ほこりをかぶったボトルの対比が印象に残りました。1本のブドウの木から1本のワインしか作らない製品や、収穫したブドウを日陰干しして糖度を上げて作るワインなど、独自の高級品を生み出そうとする熱意に、みんな感心していました。

このワイナリーは、バス数台分の団体客でも受け入れられるレストランを備えており、我々が行ったときも別の団体客が入っていました。



ヴェラツァーノ城ワイナリーにて

した。昼食はそこで取り、キアンティクラシコ、キアンティクラシコリゼルヴァ、白ワインの3種類を

飲ませていただきました。派遣市民団の添乗員によると、日本では大手の旅行代理店や有力ワイン販売店によって、このワイナリー

リーのヴェラツァーノ城は、未舗装の林道をバスで約30分上って行った小高い丘の上にあります。辺りにはこの城以外の建造物はなく、糸杉に囲まれた建物や庭はきれいに管理されていました。目の前から緩やかに下り向こう側へと上る斜面にはブドウ畑が広がり、遙か向こうの丘の上には同じようなたたずまいの館が霞んで見えました。

もう1つの見学先はワイナリー「レ・レッジ」です。牛久市の「スローシティをめぐすまつり」では、日本でもあまり知られていないけれど、ワイン通には高く評価されているワインが数種類選ばれて出されました。「レ・レッジ」もその一つで、「スローシティをめぐすまつり」でこのワインを気に入っている

### 牛久で出会ったあのワイン

#### キアンティクラシコ「レ・レッジ」の里へ

の方が「ぜひともこのワイナリーを見学した

### 添加材いっさい加えず

#### むかしながらの製法を守る

マネットティレンガ工場では社長自ら操業中の工場の中を案内してくれました。改修されている牛久駅東口駅前広場の歩道に敷き詰められているのがマネットティ社のレンガです。フィレンツェ最大の建造物であるドゥオーモ（サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂）のドームの屋根にはマネットティ社のレンガが使われています。

このような形跡が一切見当たらないのも不思議でした。ブルネットティオリリーブ油工場では、トスカーナの家庭でパスタを作るとき使っていた昔な

このレンガはものすごく固いのが特徴ですが、固くするための添加材は一切使用せず、昔ながらの製法でつくっているとのことでした。周囲は緑いっばいで、近くで山を掘り返している

このオリーブ油工場には近郷近在の農家が作るオリーブの実がすべて集められ、工場ではそれをきれいに洗って、いっさい添加物を加えずに生のまま絞り、水分を除いてひたすら油の純度を上げます。そのよ

### 目立つスリムな若者たち

#### 伝統的な食生活のおかげ?

うな油を使ったパスタやオリーブ油の食事をとっているからなのか、若い人たちが皆スリムで、肥満の人を見かけないのが、とても印象に残ったという参加者からの感想もありました。



マネットティレンガ工場

がらの器具で、有機農法で育てた地元産の小麦粉でパスタをつくる実演を見せてもらい、昼食には同じパスタを食べさせてもらいました。

「レ・レッジ」は家族経営の小さいワイナリーですが、日本の酒蔵の杜氏に当たる技術者には、大学で醸造学を修めた人を雇っていました。ワイン愛好家には、ヴェラツァーノ城の巨大な樽よりも、こちらのバリック樽と呼ぶ小さな樽の方が印象深かったようです。

このワイナリーでは試飲させてもらっただけでなく、各自1本ずつお土産にもらって帰りました。ワイン好きの人から「そんなに高価ではないのだろうか、クオリティの高さにびっくりした」との感想がありました。

# 参加者がテーマを持ち楽しんだ訪問

## 視察に大きな意義

### グレーヴェ・イン・キアンティとフィレンツェの違いも

最初の3日間をグレーヴェ・イン・キアンティ市で過ごした後は、ピサ、フィレンツェ、ローマを視察しました。ピサでは斜塔、洗礼堂、大聖堂、フィレンツェでは、ミケランジェロ広場、ヴェッキオ橋、ドウオーモ、ウフィッツィ美術館、アカデミア美術館など、ロー

マではコロッセオ、フォロ・ロマノ、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂、ヴァチカン、真実の口、スペイン広場、トレビの泉などを訪れました。この視察も訪問団にとっては大きな意味を持ちました。行くところ見るところすべて歴史遺産・文化遺産。まちすべてが美術館であり、博物館であるようなイタリアのまちと、神社の本殿が20年ごとに建て替えられるなど、いつも新しくなる日本のまちとの違いをみんな強く感じたようでした。その一方でイタリアと日本の文化の違いより、イタリアの地方都市と大都市の違いの方が強く印象に残ったという方もいました。一言で言えば、フィレンツェやローマにはない、グレーヴェ・イン・キアンティ市の人たちの熱意を感じたというのです。グレーヴェ・イン・キアンティ市の人たちに感じた熱意とは、自分たちの生活文化を本当に大切に思っているグレーヴェ・イン・キアンティ市の人たちの生き方の表れだと思えるのは、決して過言ではないと思いました。



サンピエトロ寺院

## 牛久市のこれからを考える

### 参加者の感想文から

今回の訪問について「これまでいろいろな訪問団に参加したが、今回の訪問が一番楽しかった」と明言した方が複数いました。帰国後の報告会、感想文でも、参加者がこの訪問に非常に満足したことが、語られました。訪問団の参加者は皆、自分のテーマを持っていったようでした。以下、それをご紹介します。

## 田園風景や里山の自然 地域イベントも活かす

①グレーヴェ・イン・キアンティ市にはキアンティクラシコを世界のブランドに育てた技術や考え方、アグリツーリズムのまちづくりなど、学ぶべきことが非常に多い。今後トップ間だけでなく市民レベルの交流も積極的かつ



グレーヴェ・イン・キアンティ市にある美術館の庭で

玄関に置かれている壺、あるいは元グレーヴェ・イン・キアンティ市長パオロ・サトルニニ氏の考え方などの具体的な情報を、もっとアピールする必要があります。

## 理念とビジョンについて

⑤地産地消を定着させるには農業の6次産業化や有機農業の導入などもう一步踏み込んだ取り組みが必要だ。地産地消は牛久の農業生産者と牛久の消費者の新しい関係をつくることであり、そこから牛久市民の新しいライフスタイルが生まれる。

⑥牛久には、うしくかつぱ祭り、うしく鯉まつり、うしくWaiワイまつり、など地域イベントがたくさんあり、これを地産地消やスローフードに活かすことができる。

⑦牛久の歴史を掘り起こし、小川芋銭、住井すゑ等の作家や牛久城、牛久宿等の郷土史、郷土文化をアピールする必要があります。

⑧食やエネルギーの地産地消については、均質化の中でどう個性を出しているかがカギ。日本が成熟社会に向かういま、自然と共生し自分たちの生活文化を大切に作るグレー

②グレーヴェ・イン・キアンティ市がキアンティクラシコの心臓部なのに対し、牛久は日本ですべての歴史があるが現在にはつくっていないので、ワインのまちとしてのアピールは弱い。牛久が、どこの飲食店でもキアンティクラシコを飲めるようなまちになれば、「キアンティクラシコ」の飲めるまち「牛久」を都市イメージとして打ち出してはどうか。

③グレーヴェ・イン・キアンティ市については、ワインだけでなく、牛久駅東口駅前広場に敷かれたレンガや市役所の

④牛久は首都圏にありながら田園風景や里山など豊かな自然が残っており、野菜や果物など食の地域資源もある。これを農村体験活動や地産地消につなげてはどうか。

は、田園地帯で共生する生活文化をこれから創っていくかなければならない。牛久市民にとって食やエネルギーの地産地消の取り組みとは、自分たちが大事にするべき生活文化を新しく創造するということだ。

⑩理念とビジョンをしっかりと持つことが大切。グレーヴェ・イン・キアンティ市の取り組みを如何にまちづくりに活かすのか、掘り下げて討議し具体策を出し実行しなければならぬ。

⑪スタッフの骨折りにみんな心から感謝。今回の訪問旅行は事前の準備が良かっただけでなく、NHKテレビでイタリア語教室を担当していた鶴田真子美さんという最高の通訳兼解説者が付いてくれたこと、現地のガイドもみな優秀だったことで、参加者は非常に多くのものを吸収することができました。スタッフの骨折りにもみんな心から感謝しました。



ヴェラツツァーノ広場で開催されている市